

第5回北区新庁舎にぎわい創出有識者会議 概要

- 日時 令和7年3月27日(木) 9:30~12:00

- 場所 明豊ファシリティワークス 会議室

- 次第 1 開会

- ・ 前回会議からの経緯

- ・ 前回会議のご意見等に対する対応

- 2 議事

- ・ これまでの調査結果について

- ・ にぎわいのとりまとめ(中間)について

- 3 その他

- ・ 有識者会議のとりまとめについて

- ・ 次回有識者会議について

- 4 閉会

- 会議概要

- 1 開会

- 事務局から、エリアプラットフォームの設立と新たな部会の設置について説明があった。

- 委員意見等

- ・ エリアプラットフォーム側も、にぎわい検討の進捗状況が気になるのではないかと。一度説明した方が良いのではないかと。様々な会議体がある中で、誰がどのような意見を言っているのかが分かるような、顔が見える関係性が重要。

2 議事

○ 事務局から、これまでの調査結果について説明があった。

○ 委員意見等

- ・ 2 回目の職員ワークショップでは、オフィスツアーに同行したが、職員からは憧れや羨ましいといった声が挙がっていた。一方で、北区で実現できるかという声もあり、自分達の働き方との距離が感じられた。働き方の工夫が必要なのであれば、職員に向けた説明や調整ごとがいろいろと発生するのではないかと感じた。
- ・ 託児所や、高齢者が働く場所など、にぎわいや舞台とは別軸の福祉的な視点も必要。
- ・ 事業者ヒアリングの中で、機能を詰め込みすぎている、アトリエとメーカーズルームは一つで良いといった意見があった。個別の利用シーンや機能から考え始めたため、そのように見えることは仕方ない。機能やシーンを絞り込むよりも、まずは統合していくことが重要。創作したい、体を動かしたい、表現したい、学びたい、おしゃべりしたいなど、根源的な欲求や行為から派生した機能が色々と提案されている。そのような根源的な欲求や行為から因数分解して考えると良いのではないかと。おにクルの場合は 11 の動詞になっているが、北区らしい動詞は何かを考えてはどうか。
- ・ 意見はどれも良いが、意見をどのようにまとめていくのか、アウトプットをどのようにするのかを考えた上で整理するべきである。全てを現実の空間の中で実現できるわけではないので、まとめ方にはにぎわい検討とりまとめ資料も踏まえて立ち返りながら検討できれば良い。

○ 事務局から、にぎわい検討とりまとめ（中間報告）について説明があった。

○ 委員意見等

- ・ コストについては、今後いろいろと検討があると思うが、にぎわいの議論が失われないようにしたい。譲れないものとして、「まち・ひと・わたしとであう」というコンセプトがある。多様な人と出会えることが北区新庁舎の特徴である。ただ、オープンスペースがあれば多様な人たちに出会えるわけではなく、こういう場であるからこそ出会えるような、北区らしい多様性を許容しているという部分が重要である。「ひととであう」ということを、必ずしも 3 つの中で突出させる必要はないが、意識する必要がある。そうでなければ、広場が削られる可能性が高い。まちと出会う空間としては、オープンスペースが重要になることを、にぎわい創出有識者会議の委員としては強調したい。
- ・ 南西側のプレイマウンテンを広くして、北東側を少し削ってはどうか。北東側が活かされていないのであれば、メリハリをつけて、何か役割が与えると、北東側の場所も生きてくるのではないかと。
- ・ 「まち・ひと・わたしとであう」など、踏み込んだコンセプトになっており、新しいと感じた。今ま

で居場所や舞台といった話を中心にきており、職員ワークショップや、会議の中でもいくつか議論があったが、ポジティブな活動だけではなく、深刻な悩み相談についても考慮する必要がある。低層部の3階の「ボランティアぷらざ」や社会福祉協議会がその場の中心だと思うが、低層部にぎわいの中では独立しているように感じる。「目指す姿」に、「みんなで過ごしたくなる」とあるが、「生活を支える」、「困りごとを解決する」といったニュアンスを、「ひととであう」という言葉の中に含め、本当に困っている人にとっても居場所になるというメッセージが発信できたら良い。他の人たちに見られないで相談できる場などが、低層部の中で空間的に担保されていることが重要になるのではないかな。

- ・ 困りごとや相談ごとなどが子育ての分野に特化しているが、社会福祉協議会は、住める家がなく、どのような福祉サービスを使ったら良いのか分からないという相談や、外国人の相談なども受け入れている。低層部でそれらを受け入れる機能が担保されて、コンセプトに結びついたり、可視化されたりすると良い。
- ・ 各課というよりは、「ボランティアぷらざ」や社会福祉協議会で相談を受け入れることができれば良いのではないかな。困った時に低層部で相談できるという雰囲気があると良い。
- ・ 上層部と低層部の切り替えが低層部の雰囲気に影響を与えるのではないかな。
- ・ ゾーニングのキーワードの「かおづくり」、「つどい」、「はぐくみ」、「かつどう」は、重要な部分である。一方で、「かつどう」、「つどう」は区民が主語、「かおづくり」は設計者が主語であり、動詞の主語が異なるため、言葉のレベルが一致しておらず、違和感がある。社会福祉協議会や「ボランティアぷらざ」のケア的な機能と、趣味等の活動の場を「かつどう」で包括していることにも違和感がある。広い意味で様々なことを解決する、解決したい人もやってくるとなると、そういったニュアンスを含めた方が良いのではないかな。個人や社会の課題を「であい」を通じて解決していく場であるという議論を検討してほしい。「まちとであう」、「ひととであう」、「わたしとであう」という4つの基本テーマと、8つの機能があるが、おにくりは11の動詞で表現しているように、ユーザー目線のやりたいことで整理する考え方もある。4つの基本テーマ、8つの機能、おにくりの11動詞の北区バージョン、4つのゾーニングの相互関係を一つに整理し、擦り合わせができると、コンセプトが明瞭になるのではないかな。
- ・ 表現の構成について、「機能と空間デザインの基本方針」、「しくみのデザインの基本方針」が有効に生きていない。「空間の自由度を高める」、「駅前やまちなかと一体となった設えとする」等は方法論であるため、図面の構成に含めても良い。「まち・ひと・わたしとであう」は良いが、「みんなのひろば」の内容は最後まで変わる可能性がある。飛鳥山公園も含めた新しい人の流れ、緑や水を重視したデザイン、バリアを作らないなど、当たり前の内容を先に書いた方が良い。それを飛ばして方法論を説明している点が気になる。「みんなのひろば」のコンセプトを強く押し出すよりも、「目指す姿」や大切にしたいことをしっかりと書いた方が良い。エリアプラットフォーム等に説明する際も、

分かりやすい説明が求められる。

- 設計のコンセプトを変えた方が良いというわけではないが、新庁舎と直結したコンセプトになるため、にぎわい検討のコンセプトや「目指す姿」との繋がりを上手く説明できると良い。
- 6つの設計のコンセプトとの違いが気になる。項目はいずれも入っており、表現が異なるということだったが、これをどのように最終的に整理するかを考えていた。
- 託児所は開発事業者が担った方が良いという考え方もあるが、開発事業者と議論する際に必要なものを挙げていく必要がある。
- にぎわい検討の基本方針には方法論もあるが、明確に図面やダイアグラム等を示す方が良い。エリアプラットフォーム等で説明する際には、当たり前の原理原則が1ページにまとまっていないと説明しづらい。説明は、デザイン等のハード面と、しくみ等のソフト面を横断するような、「エリアのイメージを変える」、「拠点をつなく場になる」などの内容になるのではないかと議論の大前提になっている当たり前の言葉がステートメントとして出てくる。いろいろな人にバリアを作らない、多世代、子どもが生まれてもストレスなく使えるなど、当たり前の言葉がまとまっていると、外部の団体とコミュニケーションしやすいのではないかと。
- 空間は変えられないが、機能は変えるということは、ある程度想定しておかないといけない。
- ジオガーデンという設計のコンセプトがあるが、「緑を大切にしたいデザインにしよう」など、当たり前のことを説明する場所がないので、改めて頭出しするのが対外的に説明しやすい。
- エリアプラットフォーム、一般職員、区民への説明を今後考えていく上で、分かりやすくしなければコミュニケーションできないが、「まち・ひと・わたくしとてあう」は分かりやすいようで高度である。一般の区民にも分かりやすい言葉を考えて方が良い。
- にぎわい検討のまとめ方としては、新庁舎だけで実現するのではなく、エリアプラットフォームとも連携し、再開発マンションなど、周辺エリアと一体で実現できるという表現の方が、区民にとっては分かりやすく魅力的になるのではないかと。

3 その他

- 有識者会議のとりまとめについて
- 次回有識者会議について

4 閉会